



中学入試の行き先 2016年の中学入試

2016年度は、関西圏では1月16日の統一入試日を、首都圏では2月1日の主要校の入試日を皮切りに、中学入試時期を迎えました。受験者数の動向は、2007年のリーマンショック以前は公立小学校卒業生数の増減が大きな要因となっていました。2009年以降は景気の影響にも左右され、2008年の大幅な減少以降、前年対比は2014年まで微減傾向が続きました。2016年度は、その減少傾向が緩和されたことや、景気の好転の影響により、**2015年度入試に続き横ばい状態から微増傾向となったのではないかと予想**されます。(統一入試日や2/1受験日の総受験者数を該当地域の小学校卒業生数で割って算出、統一日・2/1受験日にも当日午後入試受験者、統一日・2/1受験日以外での受験者がいたりするため、概算予想となります。)

私立中学受験、および国立・公立中学受験においては学習環境の選択が大きな目的である場合が多いようです。しかし近年では、**2020年からの大学入試改革に対応した教育、実用的な国際教育、大学の理系学部への進路実績という観点から中学受験を望まれるご家庭も増加傾向**にあります。また、中学入試の入学時の難度に比して、大学入試で高い実績を出している学校への人気も高まっています。多くの中高一貫の私立中学が中2までに中学内容の学習を進め、中3段階から高校課程の学習に入れるのに対して、公立中学に進んだ場合、中学三年間は中学課程を学習し、高校学習内容を自発的に勉強するよりは、高校入試の合格率を高

めるための受験勉強に時間を費やさなければならない現状があります。もちろん、先取り学習がすべてよいわけではありません。しかし、お子様の学習到達度に応じた学校選びという意味において、選択肢を増やすという点でも私立受験を考えるケースが増えています。

私立中高も、少子化の現状の中、公立高校の台頭や公立の中高一貫校の設立に対して、授業料に見合った教育を実践し生徒数を確保しなければならない状況にあります。建学の理念や学校の特色を残しつつも、独自の学校改革や新たな取り組みを行っている私立中高が多くあります。その一例は、**学校内予備校や高大連携の取り組み、キャリア教育の実践**などです。また、先に述べた2020年からの大学入試改革にも注目が集まっています。私立中高各校が、中高6カ年の教育方針や授業のスタイルをいかに鮮明に打ち出せるかも、各校の今後の入試動向に少なからず影響を与えていくものと考えられます。

入試問題の傾向については、各校とも基本的には過年度の出題傾向を踏襲したものでした。

□算数

難関校では受験生の処理能力や思考力を問う問題を、中堅校では算数の基本的な知識や計算力を問う問題を出題していくという、例年通りの全体的な流れに、大きな変動はありませんでした。

□国語

物語文・論説文の読解問題が基本となりますが、物語文では受験生と同世代を主人公とした作品、論説文では新書などの一部を抜粋した文章が多く見られます。難関校では記述式で答える問題の割合が高くなっており、中堅校では基礎力を問う割合が高くなっています。

□理科

物理・化学・生物・地学がまんべんなく出題されます。難関校では物理・化学分野の計算を含む問題の割合が高く、中堅校では知識が確実に定着しているかを問う問題のウェイトが高いです。

□社会

歴史・地理・公民が幅広く問われます。中堅校では知識の確実な定着を問うものが中心ですが、難関校では基本事項の暗記に加えて、多様な出題形式に対応できるよう「情報を思考する力・判断する力・表現する力」を養っていく学習が要求されます。

(文/学林舎編集部)

英語教育の行き先 文部科学省が考える英語教育

日本では、日常生活で英語を使う機会がありません。その上、学校での英語の授業は教師が生徒たちに一方的に知識を与える講義型が主流となっています。そのため、生徒たちが主体的に英語を使用する機会を十分に得られず、英語を習得できていない、という反省がありました。そこで今、生徒たちが授業中に大量の英語にふれ、実際に使う機会を増やす取り組み(英語で授業を行う)がなされています。

文部科学省では小・中・高等学校を通じた英語教育の改善、生徒の英語力向上を図るため、2013年に「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を設定しました。これは、2020年開催予定の東京オリンピック・パラリンピックを見据えたもので、児童生徒が訪日外国人に英語で日本文化を発信し、国際交流やボランティア活動などに積極的に取り組むようになること、また、日本の伝統文化や歴史を知るなどの日本人としてのアイデンティティを持たせる教育の拡充を目標としています。つまり、**自国を世界に向けて発信できる人材を育成することが狙い**といえるでしょう。**具体的には高校卒業段階で、英検であれば2級～準1級取得、TOEFL iBTであれば57点以上得点と設定**されています。

この目標を達成するため、小学校中学年では、学級担任を中心にコミュニケーション能力の素地を養う指導(週1～2コマ)、高学年では、専科の教員を積極的に活用しながら、初歩的な英語の運用力を養う教科型の指導(週3コマ)を行う方針です。中学校以上では授業を英語で行って身近な話題を表現できる能力を伸ばし、高等学校では発表、討論、交渉など、英語話者とある程度流暢にやりとりができる能力を養うことが定められました。生徒側だけでなく、教師側や指導体制についても、小・中・高等学校において教員の英語力向上、外部人材(ALT)の活用促進、指導用教材の開発推進など、整備が進められています。

2014年に高校3年生を対象に行われた「英語力調査」の結果、「聞く」「話す」「読む」「書く」の**4技能すべてで課題**が見つかりました。特に「話す」と「書く」、また、「聞いたり読んだりしたことに基づく意見交換や書く活動」のように複数の技能を組み合わせた活動で生徒のつまずきが見られました。中学・高等学校の生徒の英語力に関するアンケート結果でも、英検上級取得者の数はこの3～4年間ほぼ横ばいです。

この現状を踏まえ、文部科学省は2015年、「生徒の英語力向上推進プラン」を策定しました。その基本的な考え方は、国および都道府県が明確な達成目標(GOAL)を設定することと、その達成状況を毎年公表して計画的に改善を推進することの2点です。これにより、各都道府県での英語指導が大きく見直されると予想されます。さらに、**中学校では英語4技能を測定する全国的な学力調査を、2019年度より国が実施することが予定**されています。また、「高大接続改革実行プラン」に基づき、**英語4技能による新テスト「高等学校基礎学力テスト(仮称)」「大学入学希望者評価テスト(仮称)」の導入も検討**されています。民間の資格・検定試験の活用も、引き続いて推進していく方針です。

これらの指針に基づき、中央教育審議会では、次期学習指導要領を通し、授業や入試の改革に着手しています。インタビュー形式のテストや**英語による小論文**

など、英語でのアウトプットが重視される傾向になると予想されます。学習者には、自ら課題を見つけ、自ら解決していくという主体的な学習の姿勢が、今よりも強く求められるでしょう。教師側も、小・中・高等学校を通じた目標設定や、それに基づく指導の体系化、4技能の習得を評価する基準など、整備しなければならない問題が山積しています。教師が英語で授業を行う必要性からも、今まで以上に高い意識と学習意欲が必要とされるでしょう。世界で通用するグローバルな人材育成のため、さらなる取り組みが求められています。

(文/学林舎編集部)

“思い込み”からの逸脱 —大人であることの解体がすべてだ

大人が大人であることを子どもに見せつけるように振る舞っている限り、子どもと共に生きていくことはできない。

子どもは大抵の場合、大人に従ってしか生きてこれなかった。いつも大人を見倣っていくように命令されてしか存在できなかった。これを可能にできたのは、子どもがある大人を自分が生きていく上での手本と考え、尊敬してきたからだ。昔は、少なくとも昭和初期でも子どもは大人を尊敬の目差しで見ている。力強いとかお金を稼いでいるとかその理由はたくさんあった。しかし、教師はそうではなかったかも知れない。総じて、単純に否定できない雰囲気だけはあったと思う。

ところが、まさに時代は変わった。いま、子どもから尊敬される人間はいるだろうか。いるとしたら「あんな人間になりたい」と思われる人間だけだろう。こう視点を変えてみると、その候補者はたくさんいる。ノーベル賞をとった人、人のためになることをした人などだ。これは子どもの変容も加わっている。最近の子どもたちは臆することなく「人に喜んでもらえる人になりたい」という。

これは、大人たちが子どもを見る視点が大事だということを示している。今でも大人たちの多くは子ども

は支配される存在だという認識をすてきれないままだ。

では、大人たちはなぜこの認識から逸脱することができないのだろうか。

それは<知>の捉え方の誤りからきている。大人たちは子どもに対して自分の生活経験から向きあおうとはしていない。まったく有り触れた常識—テレビなどのメディアが垂れ流す情報を鵜呑みにした知識—右から左へ投げることしかない。それは自分が他の大人をどう評価しているかを考えれば直ちに分かることなのだ。自分が尊敬している人間は誰か、どんな人間であるかを子どもに伝えられるかどうかを考えてみるとすぐに分かることだ。

そうすると子どもと関わりのある大人のすることはただひとつだ。それは共に学ぶことしかない。なぜそのような解き方になるのかを共に考えることだ。子どもが考え込んでいたら、何がひっかかっているのかと一緒に考えることだ。そして、大人でしかできないことを子どもに伝えることが唯一できることだ。

すなわち、結果としての答えではなく、なぜその学びが誕生してきた、どのように伝わってきたのかを子どもに伝えること。それが大人にしかできない<伝授>なのだ。それを可能にするのは、大人が蓄積してきたこと、すなわち人類が蓄積してきたことを自分にも分かるようにかみくだいて伝えることにおいてだ。

最近の大人を見ていて気づくことがある。それは、あまりにも自己中心的すぎるとのことだ。このような大人しか見ることができない子どもを自己中心すぎると批判することは天に唾することに他ならない。

他人にあれこれいうまえに「自分はどうか？」から吟味するしかないと思う。そういう意味において、すべての概念を洗い直し、組み立て直すことが必要かつ可能になった時代がやってきたと、前向きに考えられる絶好の機会がやってきたと実感できる。

(文/ 2005 年学林舎情報より)

国語を 考えてみる

文／学林舎国語顧問 森本 秀俊

ああ、素晴らしき哉、日本語②

- 子どもに文を書かせる方法

これまで2回にわたって、表現力の養成について書いてきました。表現力をつけるのに何よりも大切なことは、文を書くということです。ところが、たいていの子どもは文を書くという作業が嫌いです。読書感想文や人権作文といった課題が夏休みの最後の日までできずにいるお子さんも多いことと思います。そこで今回は、子どもに文を書く気にさせる2つの方法について見ていきましょう。

1つ目の方法は、「ファミリー新聞」です。これは、その名の通り、家族で新聞を作ることです。「家族旅行」「家族のイベント」「子どもの学校生活」「飼っているペット」など、いくつかの話題を集めて新聞を作り、おじいちゃんやおばあちゃん、親戚などに配るというものです。

たとえば、たかしくんという子どもが家族で北海道に旅行に行くとします。お母さんが旅行前にたかしくんにこのように話します。

「今度の旅行のことをファミリー新聞に載せるから、たかしは牧場を見学したときの記事を書いてね。お母さんの携帯電話で写真を撮ってもいいから」

すると、たかしくんは、記事を書くために牧場をつぶさに観察するはずですが、記事を書くという目的がないと、ぼおーと見ていることも、自分が記者になったという使命感で、集中して見つめることでしょう。

「牧場には、たくさんの馬がいました。たいていの馬は茶色い毛をしていましたが、中に雪のように真っ白

の馬が一頭いました。その馬は、昔、競走馬として大活躍したということです。……」

このような文章に自分の写した写真を添えて記事にすると、子どもの達成感は大きく、文を書くことに興味を持つに違いありません。

もう1つの方法は「空想日記」というものです。ふつうに「日記を書きなさい」と言っても、子どもはすぐにあきて、それこそ3日坊主で終わってしまうでしょう。それは、毎日の生活の中で起こることはドラマチックではなく、日記を書いても楽しくないからです。そこで、子どもに次のような提案をします。

「あなたがアイドル歌手だと想像して、日記を書いてみて。きっとおもしろいことが書けるわよ」

もちろんアイドル歌手に限らず、「プロ野球選手」「俳優」「忍者」「ドラえもん」など、なんだっていいのです。子どもが興味を示すような対象を提案して、その人になりきって日記を書かせます。

「1月1日 晴れ 今日東京ドームでカウントダウンコンサートをしました。7万人をこえるファンが集まってくれてすごく盛り上がりました。私がテン・ナイン・エイト・セブン…とカウントダウンをしていくと、会場のみんなも大きな声で叫び始め、ドームにいるみんなの気持ちが一つになりました。……」

このような日記なら、楽しくて長く続く気がしませんか？ 子どもに文を書かせるうえで、注意すべきことを1つ。子どもの書いた文をけなしたり、注意を加えたりしないことです。自分の書いた文に文句を言われれば、子どもは文を書くことが大嫌いになります。どんなにつたない文章でも、「表現がユニークでおもしろいわね」などとほめてあげましょう。

ああ、素晴らしき哉、日本語。(つづく)

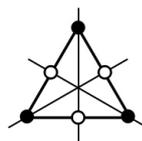
算数・数学から見える世界

文／学林舎算数・数学顧問 深見 和孝

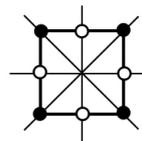
年が明けて早々に、受験シーズンに入りました。先月は私立中学入試のヤマ場であり、今頃は、受験生や保護者の方々はホッとされているのでしょうか。

つい最近、私のところに、今年度の私立中学入試問題の解答解説の執筆依頼がありました。これまで算数の問題集の執筆や公立中適性検査の解答解説の経験はあるのですが、私立中入試に関しては初めてのことでお引き受けしようかと迷ったのですが、私の出身中学の入試問題もあり興味半分にお引き受けしました。ところが、送られてきた入試問題を見てビックリ！これって高校受験の入試問題じゃないの？と思うようなものでして、これを小学生がどうやって解くのか、見当が付きません。とりあえず、中学・高校範囲の知識で解いて答えは書けたのですが、肝心の解説の書き方がわかりません。早速、注文先に連絡をして、「すみません。私にはムリです。」とキャンセルさせていただきました。私が受験生の頃とは入試問題の傾向がだいぶ変わってしまったのでしょうか。あの問題を小学生がどうやって解けるのか、そもそも小学生の学力を測るための問題なのか、不思議でなりません。

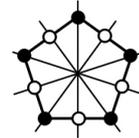
では、前回のコラムで出した「表現力」をみる問題について、正答例を紹介したいと思います。前回の問題は、「正 n 角形の対称の軸は n 本ある」といえる理由を説明するものでした。



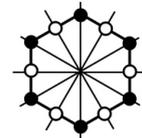
正三角形の軸は 3 本



正四角形の軸は 4 本



正五角形の軸は 5 本



正六角形の軸は 6 本

上の図で、●は頂点、○は辺のまん中の点を表しています。この●と○の数と、対称の軸の本数の関係に着目して説明してみます。

【正答例】

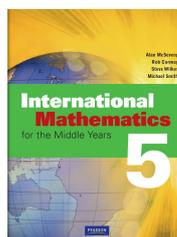
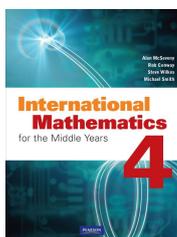
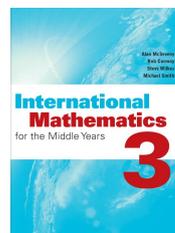
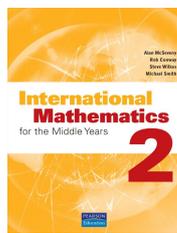
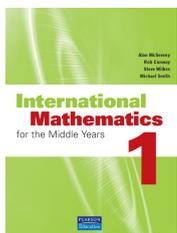
正 n 角形で、正三角形や正五角形のような n が奇数の場合と、正四角形や正六角形のような n が偶数の場合に分けて考えます。

まず、 n が奇数の場合は、対称の軸は、「頂点と辺のまん中の点を通る直線」です。頂点は n 個、辺は n 本あるので、対称の軸は n 本あります。

次に、 n が偶数の場合は、対称の軸は、「2つの頂点を通る直線」と「2つの辺のまん中の点を通る直線」の2種類あります。頂点は n 個あるので、「2つの頂点を通る直線」の本数は n 本の半分です。辺は n 本あるので、「2つの辺のまん中の点を通る直線」の本数も n 本の半分です。これらを合わせて、対称の軸は n 本あります。よって、正 n 角形の対称の軸は n 本あります。

以上が、私なりの正しい説明です。言葉で説明するのはムズカシイですね。(つづく)

国際バカロレア (IB) 資格対応 MYP 数学教科書販売中



クロスロード Crossroad

第54回 文／吉田 良治

受験シーズン

近年大学受験では推薦入試やAO入試など、いわゆる一般的な入学試験を免除した、多様な入試を実施することにより、一般的な入学試験での受験数が減少しています。2014年に大手予備校の代々木ゼミナールが、全国にある約7割の予備校を閉鎖するに至った背景も、少子化による大学進学世代の減少だけでなく、予備校活用の大きな要素でもある、一般的な大学試験での受験者数の減少が大きいと思います。とはいえ、1月の大学入試センター試験に始まり、2月上旬には私立大学の一般入試、2月後半から3月にかけて国公立大学の2次試験も実施され、今年も本格的な大学入試シーズンとなりました。

注目されるのが国立大学で推薦入学を実施する大学が増えて、今年は東京大学でも初の推薦入学が実施されました。推薦入学枠は10学部で約100名程度ということですので、まだまだこの入試制度が主流になることはありませんが、今後国立大学だけでなく私立大学も含め、学力の点数のみで入試の合否を測るのではなく、総合的な判定基準を確立することが加速していきます。

今回の東京大学の推薦入試の選考内容は、一次審査の書類選考や面接、そしてセンター試験を経てということですので、全くの無試験ということではないにしても、これまでのような大学ごとに実施されてきた2次試験が、実質的に免除されるということになります。書類選考では「総合的学習時間の成果」、「語学堪能、国際的なプログラム活動の実績」、「社会貢献活動」、「国内外の数学・科学・物理・化学・生物オリンピックで顕著な成績」、「特色ある高度な研究活動・創造活動」等、具体的な活動実績も問われますので、これまでのようなテス

トの点数至上主義では、書類選考でふるい落とされてしまいます。また、面接で人物面も精査されます。理学部の推薦要件に、「芸術・文化、スポーツなどでの意欲的な活動やリーダーシップを発揮した実績も評価に加味します。（実績の例：在任中に顕著な活動を行った生徒会会長、全国大会レベルでの入賞を果たした部やクラブで主導的な役割を果たしたのものなど）」という項目がありました。東京大学の入試がここまで多様な要素を盛り込んでくるということは、高校3年間机にしがみついて受験勉強に打ち込むことでは対応できないことを意味し、これまでの大学入試の在り方そのものを根底から覆すことになります。

少子化で大型予備校もその役割を終え、国立大学ですら推薦入学を実施し、多様性も問い始めたということは、これまで〇〇大学進学率No1!といった中高一貫校なども、これまでの難関大学入試対応ではなく、これからは新たな受験仕様に対応していくことが求められます。最後にスポーツに絡めた話をするならば、今回の東京大学の推薦入学で理学部の推薦要件にある、“スポーツでの顕著な実績あるもの”が日本でも増えていけば、ノーベル賞のメダルとオリンピックメダル、どちらでも可能性を秘めた人材を輩出できることになります。日本ではどちらか一つしかできない、と諦めがちですが、アメリカではそれが当たり前とされていますので、今回の東京大学の推薦入学には、どちらも同時にチャレンジする人材育成に期待していけるのではないのでしょうか。（つづく）

吉田良治さんプロフィール

1962年生まれ。1998年にワシントン大学へアメリカンフットボールコーチ留学。2000年リーグ制覇、2001年ローズボウルに出場し、ローズボウル制覇に貢献。国家レベルのリーダーシップ教育に貢献した、ランブライト元ワシントン大学ヘッドコーチよりリーダーシップ教育を学ぶ。

全米の大学で人格形成プログラム普及に貢献した、ライス元ジョージア工科大学体育局長よりライフスキル教育を学ぶ。

吉田良治さんBlog

<http://ameblo.jp/outside-the-box/>